

# 朝日山だより



平成25年5月 ピクニック

佐賀市 神野公園にて

## 社会福祉法人 あさひ会

生活介護事業所 朝日山学園・ケアホーム ひまわり・こすもす  
ヒューマンサポート タッチ・佐賀県発達障害者支援センター結  
〒841-0073

佐賀県鳥栖市江島町字西谷3300-1

TEL (0942) 84-3266

FAX (0942) 84-3286

E-Mail : [asahiyaama@grace.ocn.ne.jp](mailto:asahiyaama@grace.ocn.ne.jp)

## 『障害者総合支援法の下で

### 利用者の仕事・活動・そして私たちの役割』

施設長 高取 正憲

障がい者にとって働くという事はどの様な事でしょうか？一般就労を希望する方には就労移行支援事業があり、一般就労が難しい方には、生産活動等の機会を提供する就労継続支援事業があります。

朝日山学園が行っている生活介護事業は「地域の中で就労の機会等が得がたい在宅重度障害者が通所し、機能訓練、文化的活動、日常生活訓練等を行うことにより、その自立を図ると共に生きがいを高める事」を目指しています。利用者が現在



行っている仕事は、アルミ缶潰し、ペットボトル回収、ネジのパック詰め等がありますが、その目的は収入を得る以上に、自立した活動で生きがいを見いだすことです。私たちが仕事をして給与を頂き、好きなことをしたり、好きな物を買ったりしながら生活を送るように、利用者も自分の出来る仕事を一生懸命頑張っ、好きなことをする。そこに満足感や生きがいが生まれてくるものだと思います。居住の場面においても、自分の好きなところで気の合う仲間や好きな人と一緒に暮らし、その中で自分の出来ることをして、それが他者の為にもなって、役割のようなものが出来ていくことがより充実した生活に近づくのだと思います。

平成25年から障害者自立支援法は障害者総合支援法へ段階的に移行しています。この新法の理念の中に、①全ての国民が、障害の有無にかかわらず、等しく基本的人権を享受するかけがえのない個人として尊重されるものであるという理念、②全ての国民が障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現、③可能な限りその身近な場所において必要な（中略）支援を受けられること、④社会参加の機会の確保、⑤どこで誰と生活するかについての選択の機会が確保され、地域社会において他の人々と共生することを妨げられないこと、⑥社会的障壁の除去とあります。



これから私たちが担っていく役割は、利用者の思いを受け止めつつ、生きがいを感じられる活動の充実と、今後間違いなく迎える利用者の高



齢化に対応できる環境的配慮や支援者のスキルアップと思います。

新法の附帯決議には「障害者の高齢化・重度化や「親亡き後」も見据えつつ、障害児・者の地域生活支援をさらに推進する観点から、ケアホームと統合した後のグループホーム、小規模入所施設等を含め、地域における居住の支援等の在り方について、早急に検討を行うこと。」と記されています。利用者の思いを受け止めることが出来るような制度の構築を望んでいます。

## ☆あさひやまりレー

### 『役割を感じる事』

支援主任 松田 浩平

「利用者の可能性を広げたい」支援の中で日々課題に感じていました。スタッフ間で話し合いをかさね、「分かる・出来る」環境を今までも考えて行っていました。環境を整える事に比重をおき、日々、準備に追われる毎日でした。

確かに、利用される皆さんが、活動に取り組みやすい環境を整えることは必要です。しかし、やり過ぎていないか、可能性を奪っていないか、疑問に感じていました。自分の出来る事は自分で行うべきではと基本に戻りもう一度考えてみました。一つひとつの作業を細かく分類していくと、職員ではなく利用者の担える部分が沢山ある事に気づかされていきます。サッカーで例えれば、支援者がパスで必要以上につないでいき、相手ゴール前に立っている利用者の方に最後のパス・・・そして来たボールを利用者がシュートといった感じでしょうか。パスでつなぐ事も、相手ゴールに進んでいく事も、そこまでの過程がある事もチャレンジする事もなく、支援者が全てお膳立てしてしていました。つまりアシストが多すぎたのです。

「今日も楽しかった」「朝日山学園に来て良かった」と利用者の方に感じてもらえる支援を大切にしています。そこには、活動があり、活動を通して役割が生まれます。

これからもスタッフ間で話し合い、利用者の方々の中でできる事は何かあるのか？どのように工夫すればいいのか？を念頭におき、何事にもチャレンジしていけるように視野を広げていきたいと思えます。



## 『Uさんのペットボトルのリサイクル作業の取り組み』

支援主任 菅 洋平

朝日山学園では、ペットボトルのリサイクル作業に取り組んでいます。その中でUさんはペットボトルの飲み残しの処理を行っています。①ペットボトルのキャップを外す、②キャップをキャップケースに入れる、③飲み残しを残物入れに入れる、④ペットボトルをペットボトルケースに入れる流れです。分別する内容が多い為、違いをより明確に提示する必要があります。



まず、生じた課題はこの分別を明確にする事でした。キャップを入れる場所と飲み残しを入れる場所の違いがつかめなかった為、分別する内容を少なくしてみました。飲み残しの残物入れの中にザルを設けて、一つのケースの中に飲み残しとキャップを入れても、キャップはザルに、飲み残しはそのままケースの底に流れるようになった結果、Uさんもスムーズに分別できるようになりました。



次の課題は、作業の終了についてです。導入当初は、空のペットボトルを入れた箱を所定の位置に持って行き、終了する事ができていましたが、次第に持っていく事をせず、席を立ち終了してしまう事が見られるようになりました。その際にスタッフ側がUさんの後方に立ち、求めている行動を促したり、移動の目安になる写真カードを取り入れましたが、なかなか改善へは導きませんでした。スタッフも方向性に迷い、Uさんの表情も不安そうな毎日でした。



同時期にUさんの作業後の報酬についても課題になり、目安になる余暇を導入する事にしました。Uさんは、「CD」「人形」「ビニールボール」



等で遊ぶ事を好んでいます。その一つひとつを写真カードにしてまとめ、作業後に手を洗い、その余暇写真カードで支援者に要求。スタッフは、本氏と一緒に遊ぶ様にしました。

報酬の確立に取り組んでいく過程で、作業の終了の課題もクリア出来る動きが見られ始めました。報酬を目安にする事で、作業の終了から、所定の位置に持っていく事、そして手洗い、報酬へと流れが定着したのではないかと思います。

全体の作業工程の流れがつかめずに、作業途中で離席をするという形でUさんは私たち支援者にサインを送ったのかもしれませんが。これからの目標は、一人で出来る行程が増える事です。自立心は自信につながります。これからもUさんペースに合わせながら、少しずつ進んでいきたいと思います。



## 『A 氏の散歩の取り組みについて』

生活支援員 矢羽多 勇気

Aさんは、自閉症、知的障がいを含わせ有する方です。Aさんにとって必要な情報は、具体物で提示し活動をお知らせします。Aさんは、言葉での意思表示が難しく、表情や、その時々での行動で支援者に気持ちを伝えてくれます。日中の色々な活動の中で、散歩の時のAさんの様子が一番生き生きとしており、保護者からも「毎日散歩に行けるように」と要望もあり、個別支援計画の中にも取り入れて支援を進めています。誘導方法については、Aさんの一番目につきやすい色が赤で、散歩で使用する赤い帽子と赤いポシェットを見やすい位置に提示します。その際、Aさんの目線の動きに注目します。赤い帽子とポシェットを目で追いましたら、視野に入ったとスタッフ側が判断し、帽子とポシェットをAさんに着けてもらいます。そして、スタッフ側でAさんが進む道順の予測を立てて、人的な壁をつくり誘導していきます。その際の注意点は、決してAさんの背中を押しながら誘導したり等、力任せにしない事です。基本は、「自分で考えて、自



分で行動できる」です。玄関までの道のりを自分の判断で歩いて来た時の達成感は表情から伝わってきます。

又、散歩の場所も、「毎日散歩に行けるように」する為には、雨が課題になりました。どうしたら雨でも散歩が出来るのか支援者間で話し合い、ショッピングセンターの屋根がある場所をお借りし、雨の日も散歩に取り組めるようにしています。

Aさんが、散歩を充実して、より楽しんで、自分の活動として取り組める為にはどう支援を進めていくべきか、試行錯誤して15年になります。これからもAさんから、スタッフ側に沢山の課題が示されると思います。その都度、Aさんの思いを中心に置き、どうしたら良いのか支援者側は考えていきたいと思っています。



## 『25年度ピクニック報告』

生活支援員 宮崎 仁

「佐賀市の神野公園で、遊具施設で遊び、買い物を楽しむ」事を目標に、5月にピクニックを企画しました。実施日までは、企画をしたスタッフの私の方がワクワクしているのではないかと思える程、利用者さんの笑顔や新たな可能性の発見を想像する待ち遠しい日々でした。準備不足により、利用者さんに迷惑をかけてしまう事も多々ありましたが、充足度の高いピクニックだったと感じています。遊園地ならではの様々な遊具施設やミニ機関車等、日常生活では体験できない楽しさ・刺激に触れる事で「この利用者さんは、これは苦手だと思っていたけど、こういう配慮をすると、楽しみとして提供する事が出来るのだ」と、新たな側面を発見する事も出来ました。



その一つとして、私の担当する利用者さんは、普段は保護者の方やスタッフの判断でおやつを購入しているのですが、ピクニックでは、本人の意志で公園の売店で好きなものを選び、店員に代金を渡してお釣りを受け取る、という初めての体験を不安や緊張も少なく進める事がで





きました。そこには、自分で選んだ物を買える喜びや達成感があったと思います。

今回のピクニックの経験を今後の支援に繋げていきたいと強く思っています。

## 「市報・広報誌配布の活動目的について」

生活支援員 田中 大輔

現在、ケアホームひまわりでは利用者が月に1~2回市報・広報誌を儀徳町内のケアホームがある班の各家庭に配布しています。利用者は、それぞれ4~6部スタッフと一緒に配布をしており、障がいの状況や場所を考慮した上で配布先を決めています。利用者も意欲的に取り組んでおり、地域の方々と関わる事ができる良い機会となっています。



この配布は、①地域で暮らすため役割を持つ事②地域の方々にケアホームの存在や利用者の方を知ってもらう事の2つを目的としています。

まず、①は、ケアホームは町の中に存在し、利用者は地域の中で暮らしています。地域で暮らしていく事が求められている中で、何か役割を持つことによって地域の方々に受け入れてもらうことに繋がると思います。次に②は、地域で暮らしていく為に、私達側が地域のことを知ることが大切ですが、同時に地域の方々に知ってもらうことも重要です。例えば、災害等で助けが必要になった場合にお互いに助け合うことに繋がると思います。また、より知ってもらえるようにケアホームの広報誌を作成し、年に数回配っています。利用者の特徴やケアホームでの行事や様子の紹介を載せています。こういった活動を通してより地域にとってケアホームが身近な存在になっていければと考えています。

今後も市報、広報誌の配布を継続していき、その中で地域と交流を持つこと、ケアホーム・利用者をより知ってもらえる機会にしていければと考えています。

## ☆ボランティア募集しています

朝日山学園では日中利用者の皆さんが楽しんで過ごしてもらえる活動のお手伝いをしていただける方を募集しています。利用者の方との散歩や作業のお手伝いなどが主な活動です。よろしければ一度遊びに来てみませんか？



(TEL0942-84-3266 係 松田 まで)

## ☆探しています

ご不用になったロッキングチェアがございましたら、お譲り頂けませんでしょうか？朝日山学園よりご自宅の方へ取りに伺わせていただきます。



(TEL0942-84-3266 係 松田 まで)

## @寄付者ご芳名

平成25年4月～平成25年7月にご寄付頂いた皆さまです。いつも温かいご支援ありがとうございます。

有留 幹夫 様 於保 定夫 様 林 良子 様  
吹原 泰基 様 福島 多恵子 様 村田 昌久 様  
山崎 直美 様 (米)

## ▣編集後記

「考えれば頭がはたらく」朝日山学園のスタッフは、利用者の可能性を信じて、話し合いをかさね、頭を十二分にはたらかせている毎日です。時には、深く悩み、考える事もありますが、進むべき方向性を見失わなければ、それも良いと思います。その一つひとつの経験の積み重ねが基礎となり、朝日山学園のサービスを支える柱になります。

利用者の事を考えるという支援者の役割から、私たち支援者は、日々成長させていただく機会を提供してもらっていると感じています。

(橋口)